

山里に吹く新しい風

27

佐賀県 神崎市

木の家の伝統構法 設計コンペで山を守れ!

森林ジャーナリスト 田中淳夫

森林を守りたい、という思いを持つ人は多い。NPOなどを結成して活動する団体も全国に数多くある。その活動内容の多くは、植林や下刈り、間伐など山仕事の多いや一般人への啓発事業、そして森林を利用した環境教育を実施するものだ。

もちろん、それらが悪いというわけではない。だが、肝心なことを忘れていないだろうか。日本の森林を守る場合は林業抜きに考えられないが、林業とは基本的に森林を伐採し、木材を利用する仕事だ。そして山から下ろされた木材は、大半が住宅などの建材となる。この林業の出口に目をつぶって、林業を振興したり、森林を守ることでできるだろうか。

「このNPOを立ち上げるときに、まず考えたのは木造建築の普及でした。そのため学生向けに木の家の設計コンペを主催しようと思いついたんです」

そう語るのは、NPO法人森林をつくるの佐藤和歌子理事長。2005年のことだ。彼女は、当時26歳。だが、早くもその年に全国の大学の建築関係の学生を対象に

した設計コンペを開いた。それは毎年行われ、今年も6回目が開催予定である。

この活動に行き着くまでには、佐藤家の歴史をたどるべきだろう。

駆逐されてきた木造建築

佐藤さんの家は、佐賀に3代続く素材生産業。つまり山の立木を購入して、伐採・搬出する仕事だ。

和歌子さんの父である英さん(56)は、20代で家業を継いだ。

「自分たちが生活できるのは、山主が何十年と木を育ててくれたおかげが口癖で、いいいな施業が売り物だ。しかも伐採跡地の再造林と5年間の下刈りを無料で請け負っている。木を収穫した後は、次の世代の木を育てる手伝いまで行うのである。それだけに山に対する思いは深い。」

だが、息子(和歌子さんの弟)が、建築を学ぼうと大学に進学したところ、驚くべきことを聞かされる。

「大学では木造建築を教えていない」というのだ。たしかに戦後の日本は、木造建

く。山を守り、木の文化を広げる活動だ。しかし、自分がやっては仕事に結びつけていると思われる。そこで運営を和歌子さんに託したのだ。

伝統構法の家が条件

NPOの事業には、植林や下刈り間伐などの林業体験もある。だが最初から頭にあったのは、山からの情報発信だった。そして思い付いたのが、建築系の学生たちに木造建築に興味を持たせ、新しい提案をしてもらおうこと。それなら建築関係の学生を対象に設計コンペを開こう、そして優秀者には実際に家を建ててもらおう……と、どんどん構想が膨らむ。

だがコンペとなれば、要項を決めねばならないし、審査員も必要だ。そこで、たま

現在は立命館大学教授)を知って、直接研究室を訪ねた。鈴木教授は、日本の木造建築研究の大御所的存在である。だが、その時は何も知らなかったという。

鈴木教授は、快く審査員を引き受けると同時に、多くのアドバイスをしてくれた。そこで決めた条件は、伝統構法による家ということだ。

伝統構法とは、日本古来の家づくりである。現在の建築は在来構法と呼ぶが、実は明治以降に誕生したもの。筋交いや金具を多用している。柱などを見えなくしてしまっただけのもの。伝統構法では、合板や集成材を使わず、柱を表に出す。また国産材を使うことになりやすい。そうすれば山にも目を向けるだろう。

やがて10人の審査員が決まり、設計コンペの要項ができると、100以上の全国の建築学科にポス



建設中のモデルハウスの前の、父・英さんと和歌子さん

築の研究をほとんど行っていない。むしろ建築基準法などで、木材を使わない方向へ政策的に誘導してきた。とくに国産材は、ほとんど建築界から駆逐されてきた。

自分たちが汗水垂らして伐りだした木を使う場がなくなる。英さんはショックを受けた。単に自分たちの仕事の意義が失われるだけでなく、林業の衰退は山を荒らすことにつながるからだ。

日本の森林は、そのほとんどを人が植えてきた。育った木は収穫して次の木を植える。それが森林を若返らせ、健全さを保ってきた。この循環を止めることは、森を放棄することだ。いくら補助金やボランティアで植林や間伐を行っても、肝心の木の文化が減れば、森を守れない。

そこで英さんは、NPOの設立を思い付

自らプレゼンテーションさせる。そして最優秀賞と優秀賞2点が選ばれた。

伐採に立ち会う建築主

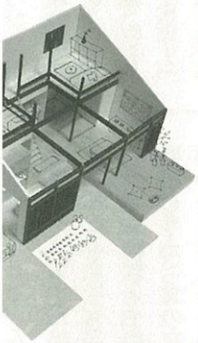
一方で地元紙を通して建築主を募集して受賞者とマッチングした。実際の家づくりを行うためだ。

建築主からすると、学生の斬新な発想に期待する。そして実際に山へ足を運び、大黒柱にする木を自分で選んで伐採を体験する。このことで自分の家となった木に、より愛着を持ってもらうのだ。

「学生の作品は、そのままでは構造上には問題があったり、建築主の家族構成や敷地などの条件と合いません。そこで審査員がチェックするとともに、両者が密に打ち合わせて、新たな家を設計します」

建築主の要望を取り入れながら、学生も譲れない設計テーマを主張する。

学生にとっては、現実の家づくりの過程を学ぶまたない機会だ。この経験を通して、木造建築に目を向け、林業に興味を持った学生も多い。だから卒業後も木造建築のできる職場を探すそうである。



作品(見取り図の部分)

があるか、最後まで